

山本幸男著 『奈良朝仏教史攷』

本書は山本幸男氏の二冊目の論文集である。山本氏は、正倉院文書の検討から天平宝字年間の写経事業を詳細に論じた前著『写経所文書の基礎的研究』（吉川弘文館、二〇〇二年）の終章のなかで、写経事業の考察における経典研究の必要性に言及しており、ここで既に本書へと向かう研究の関心が示されている。本書を読み進めるに先立ち、本書との関わりにおいて重要と思われる点を簡単にまとめておくことにしたい。第一に、写経される経典の選択には必ず教理的な裏付けがあり、そこに込められた意味内容こそが写経の意義を論じる上で重要であること。第二に、経典選択の主体者は発願者である天皇や皇后等であるが、その周辺には教理を教示する複数の学僧が存在し、尚且つ、その学僧等は唐や新羅の最新の経典や注釈書、そしてそれらをもたらす外来僧に高い関心を寄せていたこと。（↑外来僧↓学

僧↓発願者という教理の伝授ルートの設定）。そして、写経研究を仏教史や思想史研究と連係させることによって、写経の歴史的意義が明らかにできるだろうと結んでいる。このように、前著の結びに提起した議論を自ら深め、結実させたのが本書なのである。

この小文では、はじめに本書の構成と概要を紹介した後、いくつかの私見を述べてみたい。

まず、本書の構成は以下のとおりである。

序章 本書の構成と梗概

I 『華嚴経』と学僧

第一章 天平十二年の『華嚴経』講説―金鐘寺・元

興寺・大安寺をめぐる人々―

第二章 『華嚴経』講説を支えた学僧たち―正倉院
文書からみた天平十六年の様相―

徳 竹 亜紀子

第三章 東大寺華嚴宗の教学と実践―天平勝宝三年の「章疏目錄」を通して―

付論1 華嚴宗関係章疏目錄―勝宝録・円超録を中心―

第四章 慈訓と内裏―「花嚴講師」の役割をめぐって―

II 政治と仏教

第五章 天平宝字二年の『金剛般若経』書写―入唐廻使と唐風政策の様相―

第六章 孝謙太上天皇と道鏡―正倉院文書からみた政柄分担宣言期の仏事行為―

付論2 法華寺と内裏―孝謙太上天皇の居所をめぐって―

第七章 早良親王と淡海三船―奈良末期の大安寺をめぐる人々―

III 信仰と写経

第八章 文屋浄三の無勝浄土信仰―「沙門釈浄三菩薩伝」と「仏足石記」を通して―

第九章 道璿・鑑真と淡海三船―阿弥陀浄土信仰の内実をめぐって―

第十章 石上宅嗣と『維摩経』―仏教、老荘思想との交渉―

第十一章 玄昉将来経典と「五月一日経」の書写

請記録を検討し、写経所が書写事業の底本とするために収納した華嚴関係章疏の多くが慈訓の蔵書であったこと、書写終了後に慈訓のもとへ返されずに別の人物に受け取られたり、他所へ借請されたりして、章疏が僧侶間で貸し借りされていたことを指摘する。そのことから、当時金鐘寺に所持していた慈訓、平撰、平栄と沙弥標瓊等による『華嚴経』の研究会の存在を抽出する。天平十六年といえ、堀池春峰氏が『華嚴経』講説に対する研究的な存在と論じた「知識華嚴別供」が創設された年である。山本氏はこの研究会が核となって「知識華嚴別供」の活動につながっていったと述べ、堀池説を継承、発展させる。

第三章では、東大寺華嚴宗が所蔵した華嚴関係蔵書の構成を検証し、聖武天皇の華嚴経宣揚とその出家を教理的に支えた東大寺での華嚴学の在り方を考究する。山本氏の整理に依れば、経・論の蔵書は、華嚴宗の基本となる華嚴経につながる経典と、如来蔵系の経典とにおおまかに分けられるが、如来蔵系の経典は主要なものが揃っているとは言えず、ラインナップに疑問が残る。章疏の蔵書は、まず華嚴経の章疏と華嚴以外の章疏に分け、華嚴経の章疏では法蔵および法蔵に学統が繋がる僧による著作が多く、法蔵との関連がない僧による著作は、法蔵が高く評価した人物か、法蔵が残さなかった八十卷本華嚴経の経文解釈に供された

I 「華嚴経」と学僧」は、盧舍那仏造立や国分寺建立などに代表される聖武天皇の仏教政策においても重視された『華嚴経』について、国内での研究状況や研究環境を論じた五本の論文から成る。

第一章は、天平十二年（七四〇）に金鍾寺ではじまり、後に東大寺に引き継がれていった『華嚴経』講説のはじまりと、その背景にあった政治的思惑を解き明かす。『東大寺要録』収載「華嚴別供縁起」には、『華嚴経』講説の開始にあたり、はじめ元興寺の嚴智を講師にしようとしたが、嚴智自身の推薦によって大安寺の審詳を講師とすることにいったという経緯が載せられている。このような事態が起こった事情として、本章では、奈良時代前半期には元興寺と大安寺によって主導されていた『華嚴経』研究は、新羅から帰国した審詳や来日した道璿・菩提優那等が大安寺に止住したことで次第に大安寺がリードするようになっていったという学問状況があったにもかかわらず、元興寺に尊崇の念を抱いていた光明皇后に配慮した玄昉が、第一回の『華嚴経』講説の講師を嚴智にしようとしたために起こったと説く。また、玄昉の思惑通りにはいかなかったが、結果的には、『華嚴経』講説を通じて大安寺の華嚴学を金鐘寺に移植することに成功したことにも注目する。

第二章では、正倉院文書から天平十六年（七四四）の奉

と思われるものに限られた。また、華嚴経以外の章疏は、大乘起信論を理解するために集められたと考えられ、それは法蔵の『大乘起信論義記』を理解するためだったとする。全体として、法蔵の学問を研究することに主眼が置かれた蔵書構成であり、法蔵に次いで多い元暉の著作は、法蔵があまり独自性を展開させなかった実践修行に便宜があったために集められたと結論づける。

付論1は、第三章の検討に利用した天平勝宝三年（七五〇）五月二十五日付「華嚴宗布施法定文案」に貼り継がれた「章疏目錄」と、「華嚴宗章疏并因明録」（円超著、延喜十四年（九一四））、「華嚴宗経論章疏目錄」（凝然著、一二四〇～一二三二頃成立）に挙げられる華嚴宗の関係章疏類を一覧化した「華嚴宗関係章疏目錄」を提示。さらに『東域伝灯目錄』（永超著、寛治八年（一〇九四））、「新編諸宗教蔵総録」（義天著、高麗宣宗七年（一〇九〇））との照合結果も示し、奈良・平安前期の華嚴教学研究の様相を見渡せる目録となっている。

第四章は、慈訓に対して使用された「華嚴講師」という称号の意味を検討し、内裏との関係のなかで慈訓が果たした役割を論じる。通説では、慈訓の「華嚴講師」は『華嚴経』講説の講師であったことに依ると説明されてきたが、山本氏は「華嚴講師」関係史料と、天平勝宝四年（七五二）

閏三月二十八日付「造東寺司請経論疏注文案」に見られる奉請の記録を再検討し、開眼供養会に向けた動きのひとつとして、天平勝宝三年頃から慈訓は内裏で孝謙天皇・聖武太上天皇・光明皇太后らを前に華嚴経を講説し教授する「華嚴講師」であったとする新たな見解を示した。慈訓は供養会後も「華嚴講師」を勤め、密教的な修法を身につけて内裏との関係を維持し、聖武が病に伏してからは内裏で看病に当たったと推測する。なお、慈訓に関しては藤原仲麻呂派とする説や外嶋院居住説などが存在するが、本章では光明皇太后との関係を重視して、仲麻呂派とすることに慎重な立場を取り、所在についても皇太后宮のなかと推測して従来の外嶋院居住説を否定する。

Ⅱ「政治と仏教」に収められる付論を含む四本の論文では、藤原仲麻呂、孝謙太上天皇、淡海三船、早良親王など、奈良時代後期の政治史を彩った人々の宗教的活動を通して、政治・思想的な指向性を考察する。

第五章では、天平宝字二年（七五八）から三年にかけて『金剛般若経』一〇〇〇巻、『同』一二〇〇巻と二度も大量の書写事業がおこなわれた理由を検討する。まず『続日本紀』の記事により、この時期には般若経典を重用する気運が高まっていたことを確認し、玄宗に傾倒した藤原仲麻呂が天平勝宝六年（七五四）に帰国した入唐廻使によっても

たらされた知見に基づき実施した唐風政策のひとつとみなす。具体的には、『金剛般若経』の重用政策は開元二十四年（七三六）に玄宗が注釈し天下に頒布した『御注金剛般若経』に倣ったもの、大量書写事業は玄宗聖節で誦誦された『金剛般若経』の延命信仰をモデルとした光明皇太后の病氣平癒祈願ととらえ、玄宗の『金剛般若経』尊重策に影響された位置づけられる。

第六章では、淳仁天皇と孝謙太上天皇の不仲が表面化し、「常祀と小事」は天皇がおこない「国家の大事と賞罰」は太上天皇がおこなうと宣告した天平宝字六年六月から、同八年十月の淳仁廃位までの時期（Ⅱ政柄分担宣言期）における、孝謙太上天皇の仏事行為を検討する。この時期の奉写御執経所・奉写一切経司関連の史料のほとんどは孝謙発願の景雲一切経の勤経に関するものと考えられてきたが、山本氏はそのなかに『開元釈教録』の入蔵録に記載のない不入蔵経や日本に将来されていない（或いは中国でも既に存在しない）闕本経の借り出しを求める例があることを指摘し、勤経とは異なる目的での奉請が企図されていたことを明らかにした。その目的は、借り出そうとした経典の題目により三昧の実践と推測され、また時期が天平宝字八年八月という藤原仲麻呂の変の直前であったことから、孝謙太上天皇が「己師」と仰ぐ道鏡とともに独自の仏事行為を展開し、

強力な仏の加護を求めようとしたと論じる。

この政柄分担宣言期の正倉院文書にみえる「内裏」について検討するのが付論2である。本来「内裏」は天皇の生活空間であるが、この「内裏」は孝謙発願経の書写料物を供給していて、孝謙太上天皇とのつながりが濃く確認され、山本氏はこれを法華寺内の孝謙太上天皇の居所と断定する。また、「内裏」と密接な関係にあって勤経をおこなっていた御執経所について、孝謙重祚後になると尼僧の宣者が見られなくなったり、そもそも宣を記さない文書が増加したりといった変化が確認される。この理由として、即位とともに孝謙（称徳）は平城宮に遷り、勤経は法華寺に残された御執経所に委ねられるようになったことによる両者の分離を想定する。「内裏」が孝謙の居所であったとする指摘には説得力があり評者も従いたい、そうすると、孝謙の居所を「内裏」と称する慣行がどの範囲で通用するものだったかという点が重要であるように思われ、興味深いところである。

第七章では、淡海三船の述作と伝えられる大安寺碑文を手掛かりに、三船に碑文の作成を依頼した早良親王との交流関係を検討する。立太子後間もなく藤原種継暗殺事件の首謀者とされた早良親王について、『続日本紀』『日本後紀』は立太子以前のことほとんど触れないが、正史以外の史

料によって、はじめ東大寺の羅索院に寄住し、出家入道して、後に大安寺の東院に居住したことが先行研究で明らかにされてきた。一方、淡海三船もまた若くして出家して道璿に師事したと伝えられ、還俗後も大安寺とのつながりを強く持ち続けたと推測される。天智系という同じ血脈をもち、同じように幼少期から仏門に親しんだ二人が、大安寺で出会い、ほかの大安寺僧等とともに交流を重ねていた様相を、彼等の著作や師弟関係から類推される思想的背景を参考に描き起こし、若くして散ってしまふ早良親王の穏やかであり華やかでもあった日々を光を当てる一本である。

Ⅲ「信仰と写経」では、第八、十章で文室浄三、淡海三船、石上宅嗣など篤く仏教を信仰しながら官人としても活躍した奈良時代後期の人々に焦点を当て、その信仰生活や思想を考察し、第十一章で五月一日経の書写対象の選定過程を考察する。

第八章は、天武天皇の皇子・長親王の子であり、官人としても従二位大納言まで昇った文室真人浄三の信仰の在り方を基に、奈良時代の浄土信仰の形態を探る。浄三については『延暦僧録』逸文「沙門釈浄三菩薩伝」と、薬師寺に伝わる「仏足石」に刻まれた銘文（仏足石記）が伝わっており、これらの史料からは無勝浄土への往生を願う信仰を読み取ることができるという。山本氏は、浄三の信仰生

活には禅定や護戒など主体的な修行実践を通じた無勝浄土への往生の希求が見られることを指摘し、それは、奈良時代の浄土信仰が、例えば弥勒仏(菩薩)と阿弥陀仏に未分化なところが見られるなど、仏と浄土の関係が流動的で、まだ萌芽的な状態であったことと関連して、平安時代のように定式化されていない奈良時代特有の多様な信仰の形のひとつであったと位置づける。

第九章は、第七章でも採り上げた淡海三船に再び目を向け、三船の浄土信仰を形成した思想的淵源に迫る。三船に影響を与えた人物として、出家時代の師である道璿と、還俗後に交流をもった鑑真に注目し、経歴や学統から推測される二人の浄土観を手掛かりに、三船は鑑真から天台の影響による三昧行の手ほどきを受け、道璿から学んだ華嚴学を拠り所とする浄土観に基づいて阿弥陀浄土への往生を目指したと結論づける。

第十章では、石上宅嗣の『維摩経』信仰を掘り下げる。宅嗣は淡海三船とともに「文人の首」と称された奈良時代後期の知識人であり、また私邸を捨て阿闍寺とし、その東南には仏教思想をより理解するために外典(儒教関係の書)を納めた芸亭を建てるなど、在家の熱心な信徒としても知られる。その信仰には、自らを維摩詰に擬えるなど『維摩経』への傾倒がうかがえるが、山本氏によれば、当

経緯から、五月一日経の開始を天平五年に遡らせた山下有美説を否定し、天平八年開始とする旧来の説を改めて支持した。

本書の概要は以上の通りである。重厚な内容を持つ本書に対して、感想めいた発言にしなければならないが、以下では三つの点につき所感を述べていくこととしたい。

ひとつには、第五章で藤原仲麻呂の事業のひとつとらえた『金剛般若経』書写の建議者として慈訓を想定する宮崎健司氏の見解を支持する一方、第四章では慈訓を仲麻呂派とみなすことに慎重な立場を取っていることである。宮崎氏は慈訓を仲麻呂のブレンととらえる立場から論を組み立てているのだが、第四章のように慈訓の立ち位置をとらえるならば、第五章では慈訓の発案が採用された理由にも説明がほしい。在唐中の膳大丘と興福寺を通じた慈訓の繋がりが、『金剛般若経』への世間的な関心の高まりだけでは少し弱いように思われた。ただ、仲麻呂と孝謙の対立が表面化するこの時期は、ともすればあらゆる政策・人事に対する評価が政治的対立構造の枠組みに収斂されがちである。第四章における慈訓への見方は、どちらに与するでもない官人や僧等が当然存在していたはずであることに思い至らせてくれる。慈訓に対する評価の賛否はあるだろうが、重要な視点であることを改めて指摘しておきたい。

時の日本では病氣平癒の効能や、時の権力や仏法の護持に供する経典として『維摩経』が扱われる例が多く見られ、宅嗣の信仰とは隔たりがあるという。その上で、天台では『維摩経』が浄土を説く教典として位置づけられていたことに注目し、宅嗣の信仰は天台に造詣の深い鑑真との交流のなかで獲得されたものと推測する。

第十一章では、五月一日経と玄昉が唐から持ち帰った経典類との関係について考察する。写経所が書写の底本とするために借り出した玄昉将来経典は六一四部二四〇一卷に及び、その九割以上が『開元釈教録』の一切経目録に掲載されていることにより、まず五月一日経が『開元釈教録』によって写されたとする従来の説を再確認しつつ、一方で、玄昉将来経は一切経目録に掲載された経典全体の半分程度しか網羅していないことにも注意を促し、遣唐大使船の積載量など現実的な問題を考慮して、玄昉が将来経典を厳選したと推測する。しかし、結果として日本に持ち帰られた経典は一切経目録を満たすに十分ではなく、不入蔵経や録外経など目録外の経典にも書写対象が広げられた、と五月一日経の書写対象が拡大していった流れを跡付ける。このように、五月一日経は玄昉がもたらした『開元釈教録』の目録に基づき、玄昉将来経典の内実に即して決められていたと論じて、玄昉の強い影響を強調する。また、これらの

次に、第八章から第十章で扱われた奈良時代の浄土信仰の問題である。一般的には、奈良時代の阿弥陀浄土信仰は死者への追善の域を出ないものと考えられているが、ここで検討された文室浄三、淡海三船、石上宅嗣等は、浄土の種類は異なるが、自己の浄土への往生を願う信仰をもって、いたことが論じられている。山本氏は、序章において、これらの三つの章の目的を生者による願生信仰としての浄土信仰の抽出に置き、試論的なものと断っている。確かに、三者とも高い教養をもち、教理を高僧から直接教わることのできる環境にあった特別な例であり、またそれぞれが信仰する浄土や信仰生活が異なっているのは、浄土観がまだ固定されていない故に、独自の浄土観を育む余地があったともいえるだろう。しかし、あくまでも評者の拙い私見ではあるが、「死」は人間の永遠のテーマのひとつであり、死者の追善のために浄土への往生を願う行為は、自己の死後へ思いを馳せることに容易に転化するのではないか。固定された浄土観はまだ成立していなくとも、自己の浄土への往生という思想が奈良時代に遡及されることは、大いにあり得ると思われる。問題は、それが浄三や三船のような「当代を代表する知識人」(第九章/三二五頁)だからこそ可能だったのかどうかであり、今後の研究の発展に期待したい。最後に、第十一章の五月一日経の開始時期に関する問題

について、新たな見解が出されたことに注目したい。この問題は、『開元釈教録』が日本に将来される以前に書写された經典が五月一日経に含まれていることをどう評価するかという問題である。天平五年開始説では、『開元釈教録』の将来を一切書写構想の方針変更としてとらえ、書写事業がはじまった時期を重視する。一方、山本氏の天平八年開始説では、『開元釈教録』の一切経目録に基づいて五月一日経の全体像が構想され、将来以前に書写された分は、玄昉の将来經典が不十分だったために包含されたに過ぎないこととらえる。一見すると、山本氏の天平八年開始説は旧説に戻ったようだが、旧説では『開元釈教録』将来以前に書写された分が五月一日経に含まれたことを考慮せず、天平八年に開始されたと見なしているから、開始時期を同時期に置くとしても山本氏とは意味合いが異なる。今後、この問題は一切経としての書写構想がどの時点からはじまったのかという問題関心からアプローチされていく必要があるだろう。それは、五月一日経をどのようなものととらえるかという問題に他ならない。今後の発展が望まれるテーマのひとつである。

本書の内容は多岐にわたるが、小文の冒頭に述べたように、写経や蔵書構成における經典選択の意味や、信仰に影響を与えた教理の伝播過程を重視する姿勢は一貫して本書

全体に及び、従来見出されてこなかった視点を多く提示している。評者の力不足により本書の魅力を伝えきれないことが悔やまれるが、本書が多くの読者の手に取られることを期待したい。

(宮城県名取市愛島塩手宇野田山四八 仙台高等専門学校)